

## カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その6）

### （その6）＜真の意味での処女作の概念の確定＞

（文責・豊田忠義）

### （その6）＜真の意味での処女作の概念＞の確定について

#### ◎＜真の意味での処女作の概念＞の確定について

言葉と思想の専門家・吉本隆明は、＜真の意味での処女作の概念＞について、次のように述べている——「マルクスの思想体系は、二十代の半ばすぎ、1843年から44年にかけて完成したすがたをとっている。これは、『ユダヤ人問題によせて』、『ヘーゲル法哲学批判』、『経済学と哲学とにかんする手稿』〔『経済学・哲学草稿』〕によって象徴させることができる。もしも個人の生涯の思想が、処女作にむかって成熟し、本質的にそこですべての芽がでそろうものとすれば、これらはマルクスの＜真の意味での処女作＞であり、かれは、生涯これをこえることはなかったといていい」。このマルクスは、「宗教、法、国家という幻想性と幻想的な共同性について考えつくし、ある意味で〔何故ならば、その幻想性の起源からいったん生み出された観念諸形態は、それ自体の自己展開過程と自己増殖過程を持つからであり、またそれは、観念を本質としているから退行も復古も逆行もあり得るものでもある〕この幻想性の起源でありながら、この幻想性と対立する市民社会の構造としての経済的カテゴリーの骨組みを定め、そしてこれらの考察の根源である彼自身の＜自然＞哲学を三位一体として……ひとつの体系を完結した」——この「マルクスの完結した体系」は、「当ても（そしていまも）よく理解されていなかったが、理論が彼を実践のほうへ必然的につれてゆくようにできあがっていた」（『カール・マルクス』）。言い換えれば、この「マルクスの完結した体系」においては、理論と実践は、二元論的に対立しておらず、それ故に「マルクスの完結した体系」は、わざわざ理論（言葉）と実践（行為）とを二元論的に対立させて、理論（言葉）だけでなく実践（行為）も必要であると主張する必要がないように構成されていたのである。

さて、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造に依拠したバルトの啓示神学における説教（言葉）も、説教（言葉）と行為（社会的政治的実践）は二元論的に対立しておらず、それ故にイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造の中での第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした、徹頭徹尾神の側の真実としてある純粋な教えとしてのキリ

ストにあつての神・キリストの福音についての「かつて語った説教の一貫した繰り返しが、（ある状況下において、その状況に抗するそれとして）**おのずから**実践に、決断に、行動になって行った」というところで構成されている。「『今日の神学的実存』誌の第一号において……何も新しいことを語ろうとしたのでは……ない。すなわち、われわれは神と並んで、いかなる神々をも持つことはできないということ、〔第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である〕聖書の聖霊〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」としての聖霊〕は、教会をあらゆる真理へと導くのに十分であること、イエス・キリストの恵みは、われわれの罪の赦しとわれわれの生活の秩序にとって十分であることを語った。但し、私がまさにこのことを語ったのは、それがもはやアカデミックな理論などといった性格にはとどまりえず、むしろ、私がそういうものにしようともせず、また実際にそうしなかったのに、〔**おのずから**〕それが呼びかけ、要求、戦いの標語、信仰告白にならざるをえなかった、という状況においてであった」というところで構成されている（『カール・バルトの生涯』）。

その場所から、バルトは、「われわれは平和を維持するためにできる限りのことをしなければならない。しかし、このことは、われわれは平和主義者でなければならないということの意味しない。平和主義は一つの絶対主義だ（すべての主義のように）。われわれは神には服従するが、一つの原理や理念にはしない。したがって、われわれは最後の手段のために、〔一部国家支配上層の意思によって動員できる巨大で強力な軍事組織（国軍）を持っている戦争の元凶である民族国家が現存する限り〕戦争の可能性はあけておかなければならない」と考え、それ故に緊急事態のただ中で「規準はただ方向を与えることしかできない。（中略）ある特定の瞬間になした決断はおそらく、もっとも重要なキリスト教の教義よりもっと重要であるかもしれない」と考え、実際の事実に、あくまでもその相対的評価において自由および直接民主制と武装永世中立の「スイスをナチズムからまもるために私は軍隊に参加し、両国を区分しているライン河にかかっている橋を護衛するために、もしもドイツのキリスト者の友人の一人が、その橋を爆破しようとしたら、私は射殺しなければならなかったであろう」という生死の戦いの場である戦場へと向かったのである（『バルトとの対話』）。しかし、「ただイエス・キリストの名だけ」に感謝をもって信頼し固執し固着したバルトは、その根本において、当然にも次のような思惟と語りを持っている——「世界の救いを何かある国家的、政治的、経済的または道徳的な諸原理や理念や体制の内に求めようとしないで、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを、いっさいのものにまさって恐れ、かつ、愛すること、神を、大きな問題においても、小さな問題においても、彼がかつてあり、いまあり、やがてあり給う權威のままに肯定し、是認すること、私たちの個人的、社会的生活を敢えて律して、すべての善

きものを神から、神からすべての善きものを期待すべきである」、「不毛な反抗や反論を避けて」、「西でも東でも等しく通用し、西でも東でもひとしく稀であり、人々に好まれぬ福音に、無償の恩寵によって、素直に止まるべきである」（『共産主義世界における福音の宣教 ハーメルとバルト』）。バルトを本当に理解しようと考えるのであれば、このように、バルトを、その全体性において理解しなければならないのである。

さて、『カール・バルトの生涯』を著わしたエーバハルト・ブッシュは、一方で、「はじめに」において、表出と表現あるいは創造と享受という言語表現の享受の側面に依拠して、「バルトの生涯のさまざまな段階の中でどの段階が決定的な、最も重要な段階であるかという問いは、……問う者の関心やそれぞれの時代の精神によって違った答えが与えられるであろう」（百人百様の受け取り方があるであろう）、それ故に「ある人たちは、……ドイツ教会闘争へのバルトの参加が彼の伝記を解く鍵である」、「ある人たちは……弁証法神学の『青春時代』がその鍵である」、「ある人たちは……ザーヘンヴィル時代の活動にその鍵がある」と受け取るであろう、と述べている。このような、<真の意味での処女作の概念>の確定がなされないところでのブッシュの言葉だけに目をとめると、換言すればその生誕から死までの時代と現実を生きたバルトのある時空の一面だけを形而上学的に抽象し固定化し全体化して、あるいはバルトのある一面だけを拡大鏡にかけて全体化して、バルトを論じ・論じた場合には、トータルなバルト像あるいはトータルなバルト論を得ることはできない。すなわち、その時には、根本的包括的な原理的なところで誤解し誤謬し曲解した、バルト像あるいはバルト論を得ることしかできない。

例えば、神学者・佐藤司郎は、バルトの『『エキュメニカル』『エキュメニズム』(エキュメニカル運動)』について論じているのであるが、その彼によるバルトのエキュメニカル論(Web上の記事)は、バルトのそれとは全く違っている。すなわち、佐藤のそれは、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造の中でのそれ自身が聖霊の業(すなわち、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」)であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身(「啓示ないし和解の实在」そのもの)を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性)の関係と構造(秩序性)における第二の形態の神の言葉である聖書(その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」)を、第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学の思惟と語りと行動における原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指すというところに想定されたバルトのエキュメニカル論とは全く違っている。すなわち、その「神の言葉の三形

態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的境界の下でのその途上性において絶えず繰り返す、それに対する他律的服従とそのことに対する決断と態度という自律的服従との全体性において、純粋な教えとしてのキリストにあっての神・キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請）という連関・循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指して行くという、その過程での媒介的・反復的な関係性において「エキュメニカル」論を論じたバルトとは全く違っている——PDF版（その4）＜神の言葉の三形態＞の（ア）・（イ）・（ウ）および（その1）＜まことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会＞を参照されたし。このような訳で、佐藤のそれは、バルトを全く誤解し誤謬し曲解したままなされており、バルト自身の「エキュメニカル」論とは全く違っている。すなわち、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に基づかない佐藤のそれは、バルトのような媒介的・反復的な関係性という概念構成を持たないところの、直接的・無媒介的な関係性における「エキュメニカル」論、すなわち直接的・無媒介的に起源的な第一の形態の神の言葉である「キリストに聞きつつなされる」「諸教会の一致」・「諸教派の一致」運動のことである、「信仰告白における一致」運動のことである。したがって、佐藤のそれは、バルトとは全く違って、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第三の形態の神の言葉であるイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの教会を、ただ恣意的独断的にその現にあるがままの全く人間的な現存する教会の教会論的立場においてだけ論じているそれなのである。したがってまた、「カール・バルトのエキュメニカル」論とした場合、その最初から「誤謬は必然」のそれなのである。このような訳で、佐藤のそれは、「カール・バルトのエキュメニカル」論ではなくて、いつも閉じられて行く「何らかの抽象を以て始められ何らかの空論に終わるところの」「すべての大学社会の神学」（『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』）においてだけ流通可能な「エキュメニカル」論、またそれに類する教会共同性においてだけ流通可能な「エキュメニカル」論である（この「エキュメニカル運動」については、PDF版化する予定である）。

バルト者ではないところの、すなわちバルトの著作に即して語ろうとしないところの、ただ単なるバルト主義者、反バルト主義者、中立主義者たち——このような神学者や牧師やキリスト教的評論家たちは、バルト自身によって注意喚起された言葉を、すなわちバルト自身が『バルト自伝』で、「イエス・キリストにおける私の恩寵の神学〔「ただイエス・キリストの名だけ」の神学、啓示神学〕として組織だてるとい

私の仕事に生じた変化の意義を見かつ理解するためには、一九三二年と三八年に現われた私の『教会教義学』の最初の二冊〔邦訳「神の言葉」のⅠ／1、Ⅰ／2、Ⅱ／1、Ⅱ／2、Ⅱ／3、Ⅱ／4〕を、ある程度研究する必要がある」と述べている言葉を見落とし・読み飛ばしたりしているのである。したがって、『はじめての宗教論』で、恣意的独断的に、それ故に知ったかぶりして、バルトの「『教会教義学』のうち「第三巻第四部（邦訳『創造論Ⅳ』全四冊）だけはぜひ読んだほうが良い」と述べている佐藤優は、バルトを誤解し誤謬し曲解してしかバルトを読むことはできないことは明らかである。何故ならば、バルトの『教会教義学』の「神の言葉」論は、『ローマ書』「第二版序言」から著わされた様々な主要な著作の主要な内容の時間的累積に基づいたそれであるからである。

また、ブッシュは、他方で、表出と表現あるいは創造と享受という創造の側面に依拠して、バルトのその生涯におけるそれぞれの段階は、それぞれの「固有の重要性をもち、……それぞれの固有の認識を伴っている」としても、それらは、「**相関性と連続性をもつ**」とも述べている。したがって、本当は、**<真の意味での処女作の概念>**と**<カール・バルトの真の意味での処女作>**の確定をしたところで、その時代性と「相関性と連続性をもつ」それぞれの著作からバルトの全体像を構成することが重要なことなのである。このような訳で、**<真の意味での処女作の概念>**と**<カール・バルトの真の意味での処女作>**の確定をしないところで、二元論的に対立させて前期バルトだけを、あるいは二元論的に対立させて後期バルトだけを、あるいはバルトの一面だけを、あるいはバルトの著作のある一部分だけを形而上学的に抽象し固定化し全体化したところのバルト論は、木を見て森を見ないのと同じバルト論であって、バルトの真の全体像を構成することができないものなのである。したがって、木を見て森を見ないのと同じバルト論を、これがバルトだと主張したならば、その主張は、バルトを全く誤解し誤謬し曲解したものでしかないのである。したがってまた、バルトは、ある一時期に宗教的社会主義に関わったから、その一面だけを拡大鏡にかけて全体化したら、バルトを誤解し誤謬し曲解することになるのである。実際的事實的に、バルトは、当然にも、次のように述べて、宗教的社会主義から離脱している——「そこでの人間の困窮と人間に対する助けとが、聖書が理解しているほどには、真剣に理解されておらず、深く理解されていなかった」（『教会——活ける主の活ける教団』「証人としてのキリスト者」）。

さて、ブッシュの『カール・バルトの生涯』を読んでいて、最も気になったことは、第一に、彼が、**<真の意味での処女作の概念>**の確定と**<カール・バルトの真の意味での処女作>**の確定を行っていない、という点である。第二には、それは、ブッシュが、何カ所かで**<客観的な>**バルト自身の書簡や著作に即さないところで、すなわち**<主観的な>**誰々がこうメモしていた・誰々がこう言っていたという類の資料に基づいて、それ故にその全体像からしてバルト自身はそのようには決して言っていない

いにも拘らず、ブッシュは、恣意的独断的に、いかにもバルトが変節したかのような仕方で記述しているという点に、それも啓示神学か自然神学かの分岐の問題に関わることにしても、その全体像からしてバルト自身はそのようには決して言っていないにも拘らず、いかにもバルトが後者の方へと変節したかのような仕方で記述しているという点である。その時、私は、そのような恣意的独断的なブッシュの記述は、バルトを人々に誤解させ誤謬させ曲解させるに違いないと思った、ちょうど特に単なるバルト主義者や反バルト主義者や中立主義者たちが、＜バルト自身の客観的な書簡や著作に基づいた記述ではない＞そのブッシュの記述を利用して、バルトはこう言っていると人々を誤解させ誤謬させ曲解させてしまうように（ブッシュの『カール・バルトの生涯』におけるバルト自身の客観的な書簡や著作の内容に即していない記述の箇所は、誤解や誤謬や曲解があるのであって、それ故にそれは眉唾物であって決して絶対的なものではないのである——この認識と自覚は肝要なことのである）。私が読んだ限りでは、ブッシュは、確かに、前述したような仕方で、すなわち＜主観的な＞誰々がこうメモしていた・誰々がこう言っていたという類の資料に依拠して、バルトの啓示神学における主要な思想に関して、誤解し・誤謬し・曲解して記述しているところがあるのである（このことは、私のホームページとブログで指摘している）。何故そうなるかと言えば、ブッシュが、＜真の意味での処女作の概念＞の確定と＜カール・バルトの真の意味での処女作＞の確定を行っていないからである。このような訳で、吉本隆明が述べているように、神学者や牧師やキリスト教的著述家の知識をそのまま鵜呑みにしたり模倣したりすることをしない方が良いのである、バルト者であるならば、すなわちバルトの著作に即してバルトを論じようとする者ならば、それがバルトの主要な内容の問題に関する事柄である時には、それがブッシュの記事であろうと、神学者や牧師やキリスト教的著述家たちの記事であろうと、自分で、バルトの著作に即して検証し考察し語った方が良いのである。バルト自身、次のように述べている——「教授でないものも、牧師でないものも、彼らの教授や牧師〔やキリスト教的著述家たち〕の神学が悪しき神学でなく、良き神学であるということに対して、共同の責任を負っている」（『啓示・教会・神学』）、「教義学は、決して信仰と、その認識のより高い段階を意味しない」。何故ならば、イエス・キリストにおける神の自己啓示は、その「啓示自身に固有な自己証明能力」の総体的構造を持っているのであるから、「最も単純な福音の宣教も、それが神のみ心である時には、最も制限されない意味で、真理の宣べ伝えであることができるし、最も単純な聞き手に対しても、この真理を完全な効力をもって、伝えてゆくことができる」からである。「教義学者は、信仰者としても、知識を持つ者としても、神がここでなし給うことに関しては、教会の誰か一人の会員よりも、よりよい状況にあるわけではない。教義学者とは、ただ単に教義学を専攻する大学教員や〔牧師やキリスト教的〕著述家だけのことではなく、広く一般に、今日および昨日の教義学的問いによって突き当てられ動かされる者

たちのことである」（『教会教義学 神の言葉』）。

それ自身が聖霊の業（客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」）の中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」）であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の实在」そのもの）を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性）における第二の形態の神の言葉である聖書（その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」）を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者とし、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）に依拠したカール・バルトは、彼のその思惟と語りは、彼がただの人間である以上、確かに「誤謬は可能」であるが、しかし、一般的啓示、一般の真理、自然神学、「存在の類比」に依拠した神学者や牧師やキリスト教的著述家たちは、彼らのその思惟と語りは、その最初から「誤謬は必然」となるのである。何故ならば、後者の彼らは、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の实在」そのもの）を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性）における第二の形態の神の言葉である聖書（その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」）を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者としなからであり、換言すればその思惟と語りが恣意的独断的だからであり、彼らはヘーゲルのような生来的に自然的に自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を備えている人間に依拠した人間中心主義に、あるいはその多少の差はあれ半人間中心主義の「神人協力説」に、神人協力主義に依拠しているからである。

言葉と思想の専門家である吉本隆明は、『言語にとって美とはなにか』の中で、次のように述べている——「ひとつの作品は、ひとりの作家をもっている。ある個性的な、もっとも類を拒絶した〔固有な〕中心的な思想をどこかに秘しているひとりの作家を。そして、ひとりの作家は、かれにとってもっとも必然的な環境や生活を持ち、その生活、その環境は中心的なところで一回かぎりの、かれだけしか体験したことのない核〔固有性〕をかくしている。まだあるのだ。あるひとつの生活、ひとつの環境は、もっとも必然的にある時代、ひとつの社会、そしてある支配の形態のなかに在り、その中心的な部分は、けっして他の時代、他の社会、他の支配からはうかがうことのできない秘められた〔固有な〕時代性の殻をもつ」、「このようにして、ある時代、ある社会、ある支配形態の下でのひとつの作品は、たんに異なった時代のちがった社会の他の作品にたいしてばかりでなく、同じ時代、同じ社会、同じ支配の下での他の作品にたいして決定的に異質な中心〔固有性〕をもっている。そればかりでなく、おなじひとりの作家にとってさえ、あるひとつの作品は、べつのひとつの作品とまったく異なっている〔まったく異なった固有性を持っている〕」、「言語の指示表出の中心がこれに対応する。言語の指示意

識〔自己意識の対他的意識、言語の指示表出、現実的人間との関係の意識としての実践的意識〕は外皮では対他的な関係にありながら中心で孤立している、「しかし、これにたいしては、おなじ論拠からまったく相反する結論にたつすることもできる。つまり、あるひとつの作品は、たんに同じ時代のおなじ社会のおなじ個性がうんだ作品にたいしてではなく、異なった時代の異なった社会の異なった個性にたいして決定的な類似性や共通性〔連続性〕の中心をもっているというように。この類似性や共通性〔連続性〕の中心は、言語の自己表出〔自己意識の対自的意識、言語の自己表出、他者からは窺い知ることのできない人間的意識〕の歴史として時間的な連続性をなすとかんがえられる」、この「言語の自己表出性は、外皮では対他的な関係を拒絶しながらその中心では連帯している」〔例えば、吉本が、奈良時代の歌集『万葉集』の中の柿本人麻呂の詩歌「近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのいにしへ思ほゆ」を、現代という現在に現存する「ぼくが最もいい詩のひとつだとおもう」と評価する時、吉本は言語の自己表出性に関わっていると言うことができるように〕、「影響という意味を本質的に使うならば、いままでのべた両端はたとえば次のような言葉で支配される」——それは、言語の指示表出性に依拠した「人は人に影響を与えることもできず、また人から影響を受けることもできない」(太宰治「或る実験報告」)という思惟と語りおよび言語の自己表出性に依拠した「もともとオリジナルな文人なぞは、在りはしないのだ。真にこの名に値する人々は世に知られていないばかりでなく、知ろうとしても知り得ない。しかし、わしはオリジナルな文人だぞ! という顔をする人間はある」という思惟と語りである。マルクス／エンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』で、次のように述べている——「歴史とは個々の世代〔個体的自己の成果の世代的総和、類〕の継起にほかならず、これら世代のいずれもがこれに先行するすべての世代からゆずられた〔経済学的カテゴリーの〕材料、資本、生産力〔また、言語、性・家族〕を利用〔媒介・反復〕する」、と。

そのような訳で、われわれは、<真の意味での処女作の概念>を、言葉と思想の専門家である吉本が述べているように、「個人の生涯の思想が、処女作にむかって成熟し、本質的にそこですべての芽がでそろふもの」であり、それ故に「かれは、生涯これをこえることはなかった」というところで理解する。

詳論は下記で展開：

<https://think-imagine-judge.blog.jp/>

あるいは

<https://christianity-church-barth.info/>